広報 すぎなみ
Suginami
支えあい共につくる
安全で活力あるみどりの住宅都市 杉並
2/15
平成31年（2019年）
No.2248

101年の生涯、本と向き合って。

「ちいさなうさこちゃん」「ピーターラビットのおはなし」「ノンちゃん雲に乗る」などの名作の数々。子どもの頃に読んだ、あるいは今まさにお子さんと楽しんでいるといった人も多いことでしょう。親から子へ、そのまた子へと読み継がれるこれらの本を、作家・翻訳家・編集者として手がけてきたのが、児童文学作家で杉並名誉区民の故・石井桃子さんです。

特集
人
すぎなみビト

石井 桃子

| 1907～2008 |

昭和28年頃　岩波少年文庫編集者時代　写真提供：東京子ども図書館

Contents ―主な記事―

7｜3月は杉並区自殺予防月間です　8｜「30年度杉並区子育て優良事業者表彰」の受賞者が決まりました　16｜すぎなみサイエンスフェスタ

〒166-8570 杉並区阿佐谷南1-15-1 ｜ 3312-2111（代表）FAX 3312-9911（広報課直通） ｜ 区ホームページ：http://www.city.suginami.tokyo.jp/ ｜ 発行：杉並区 ｜ 編集：広報課

広報すぎなみは月２回（１・15日）発行。新聞折り込みのほか、区の施設・駅・コンビニエンスストアなどの広報スタンドに設置しています。

生誕112年。
子どもたちのための生涯

すぎなみビト

石井桃子

子どもたちよ
子ども時代を しっかりと
たのしんでください。

おとなになってから
老人になってから
あなたを支えてくれるのは
子ども時代の「あなた」です。

石井桃子
2001年7月18日

↑杉並区立中央図書館で開催された
「石井桃子展」に寄せられた自筆の色紙

かつら文庫の子どもたちと（東京・荻窪）

かつら文庫

小学生のみなさん　いらっしゃい
おはなしとスライドの会　来たい人は、
なかにはいって　申しこんでください。

石井さんの書斎を公開しています→

昭和33年、桃の節句を控えたある日、荻窪の住宅街の一角にこんな立て札が立て掛けられました。地域の子どもたちがくつろぎながら、自由に本を楽しめるようにと石井さんが自邸の1階に開いた、「かつら文庫」の始まりです。当初の蔵書は350冊ほど。原書の絵本もそろえており、文庫に集まった子どもたちを前に、石井さんが訳しながら読み聞かせを行うこともしばしば。本が子どもたちにどう読まれ、どんな言葉にどのような反応をみせるのかといったことを真摯（しんし）に観察し、自身の著作にも生かしていたといいます。

かつら文庫は現在も東京子ども図書館（中野区）の分室として地域に開かれ、子どもたちを対象に、読み聞かせ、貸し出し、「おはなしのじかん」を行っています。また、大人が利用できる日も設け、各部屋を巡る見学も受け付けています。

かつら文庫を始めるにあたり、知人から贈られた一刀彫のおひなさま。創作童話「三月ひなのつき」では、画家・朝倉摂のみやびやかなタッチでこのおひなさまが描かれています。

「三月ひなのつき」
福音館書店／物語
石井 桃子 著

撮影：池田マサカズ

石井桃子記念 かつら文庫
所在地：荻窪3-37-11
TEL：3565-7711（電話は、東京子ども図書館へつながります）
［開館時間］
子ども対象：第1～4土曜日（祝日を除く）午後2時～5時
大人への公開日：原則として火・木曜日（祝日を除く）午後1時～4時
※観覧料500円（大人のみ）。不定期で休館する場合があります。問い合わせ、見学のお申し込みは、東京子ども図書館までお願いします。

一刀彫のおひなさま公開日時
火曜日　2月19日・26日、3月5日・12日・19日・26日
木曜日　2月21日、3月7日・14日・28日
―― いずれも午後1時～4時
土曜日　2月16日・23日、3月2日・9日・16日
―― いずれも午前10時30分～正午

子どもたちよ　子ども 時代を しっかりと たのしんでください。

子どもたちの生きていく世界に、明るさを。

石井桃子さんが荻窪の自宅に開いた小さな図書館「かつら文庫」は、設立60周年を過ぎた今でも、多くの子どもたちに親しまれています。石井さんは明治40年生まれ。日本女子大学校英文学部を卒業し、海外文学の翻訳を始めた時から101年の生涯を閉じるまでの約80年もの間、多くの文学作品に関わり、言葉を紡ぎ、子どもの本の在り方を探求することに力を注ぎました。

今では誰もが知る「クマのプーさん」を翻訳し、「熊のプーさん」（昭和15年初版）として初めて日本の子どもたちに届けたのも石井桃子さんです。昭和8年のクリスマス・イブ、当時親交のあった家庭で手にしたイギリスの原書を、その家の子どもたちに即興で訳しながら読んで聞かせたというエピソードがあります。この遠い日のひとときに思いをはせると、後世に残る児童文学作品を生み出し、同時に家庭文庫を通して子どもの読書を支えるに至った石井さんの活躍の出発点を、ほんの少し知ることができるように感じます。

↑ 昭和39年、『ちいさいおうち』の作者・バートンさん（右）が来日し、石井さん（中央）、松岡享子さん（左）らと親交を深めた

石井さんは、早世した大切な親友から譲り受けた荻窪の家に昭和14年から住み始めます。以降、戦後に東北で開墾に取り組んだり、アメリカへ留学した期間などを挟みながらも、生涯にわたり執筆と暮らしの拠点を荻窪に据えました。この家には太宰治や井伏鱒二などさまざまな作家が訪れたそうです。また、文庫の仲間やお手伝いさんが同居していた頃には、さながら女子寮のようだったといいます。

やわらかな日の差す荻窪の家の書斎で、多くの文学作品に取り組んだ石井さん。99歳の時には、すでに刊行から50年の時がたっていた翻訳作品「百まいのきもの」を改訳・改題しました。「百まいのドレス」として生まれ変わったこの本の訳者あとがきで石井さんは世の中を生きるすべての子どもたちに向けて、こんな祈りを語っています。

↑植物にあふれた杉並の自宅にて

どの子どもにも、
生きていく世界がもっと明るい
世界でありますように

子どもの声に耳を傾け、子どもの本をよりよいものにと、生涯をかけて児童文学に向き合い続けた石井さんが残したものは、いつの時代も子どもたちの笑顔の支えになっていくに違いありません。そんな石井さんの世界をのぞいてみませんか。

「石井桃子」オススメ本の紹介
石井さんが手がけた作品は200冊以上。著名なものから隠れた名作まで多岐にわたります。

「くいしんぼうのはなこさん」
福音館書店／絵本
石井 桃子 文　中谷 千代子 絵

「ちいさなねこ」
福音館書店／絵本
石井 桃子 文　横内 襄 絵

「ノンちゃん雲に乗る」
福音館書店／物語
石井 桃子 著

幼年時代から小学校入学までの暮らしや家族とのエピソードが、鮮明な記憶をもとに生き生きと描かれています。

「幼（おさな）ものがたり」
福音館書店／物語
石井 桃子 作

「幻の朱い実（上・下）」
岩波書店／小説
石井 桃子 著

早世した親友と自分をモデルにした自伝的小説。ユーモアのある手紙のやりとりから2人の友情と当時の様子がうかがえます。

「こすずめのぼうけん」
福音館書店／絵本
ルース・エインズワース 作
石井 桃子 訳

「ちいさいおうち」
岩波書店／絵本
バージニア・リー・バートン 作
石井 桃子 訳

「ちいさなうさこちゃん」
福音館書店／絵本
ディック・ブルーナ 作
石井 桃子 訳

石井さんの
愛猫・キヌさん

「ピーターラビットのおはなし」
福音館書店／絵本
ビアトリクス・ポター 作
石井 桃子 訳

「百まいのドレス」
岩波書店／物語
エレナー・エスティス 作
石井 桃子 訳

「チム・ラビットのぼうけん」
童心社／物語
アリソン・アトリー 作
石井 桃子 訳

いつも自分で作った歌を歌っているプーさんと仲間のコブタたちが巻き起こすゆかいな騒動が楽しい物語です。

「クマのプーさん」
岩波書店／物語
A.A.ミルン 作
石井 桃子 訳

「ムギと王さま」
岩波書店／物語
エリナー・ファージョン 作
石井 桃子 訳

「小さい牛追い」
岩波書店／物語
マリー・ハムズン 作
石井 桃子 訳

ノルウェーの農場の子どもたちが、山の牧場で牛の世話をしながら過ごすひと夏の物語。岩波少年文庫創刊時の1冊。

※これらの本は、区立図書館で借りることができます。

すぎなみビト…区内外で活躍する区民などの紹介を通して、地域の魅力を発信していきます（毎月15日号に掲載）。